



通院送迎事業の苦悩と今後の展望

第六回 通院介護支援事業交流会開催

十一月三日・四日に(社)全国腎臓病協議会主催の第六回通院介護支援事業交流会が、東京の「ビジョンセンター秋葉原」にて行われました。「さわやか」からは四名参加し、全国より約六十名の参加がありました。

通院支援事業の歴史を振り返る

三日の午後二時より開会し、最初に全体会として、全腎協の金子副会長が講師となり「通院介護支援事業の現状と課題」についてスライドを使って、通院介護支援事業の歴史を振り返りました。

そして全腎協から見た、現時点での課題や切実な問題などを話されました。また画像資料では「さわやか」の活動状況を例に挙げていただき、大変解りやすい講演でした。



その後、質疑応答の時間があり、各地の実施団体の方々や、各県腎協の代表者が、全腎協への要望などの意見を活発に出していました。

休憩をはさみ、三つの分科会に分かれて討議を行い「さわやか」は第三分科会に参加しました。

三十四名の参加者が机を囲み、まず自己紹介から始まりました。全腎協の通院対策委員の高橋成行氏の司会で「これからの通院介護支援事業を考える」と題して各県の事業所との意見交換を行いました。送迎団体が現在直面している問題や、その問題解決の糸口を提起するなど、活発な意見交換が行われました。また「全腎協の協力が是が

非でも必要である！」や「全腎協と県腎協の連携強化をしてほしい」「皆さんがボランティアに参加しやすいように」など白熱した意見討論会となり、午後六時終了ではとても時間が足りないという雰囲気でした。

夕食・懇親会が一階のレストランで行われ、全国から集まったみなさんの、年に一度の交流の場として、各テーブルでは話が弾み、和やかな時間が過ぎていきました。

第一分科会

通院介護支援事業における県組織の役割を考える

第二分科会

「無償」という選択
長岡市喜多町地区通院送迎支援部会の場合

第三分科会

これからの通院介護支援事業を考える

中央の情報を、いち早く流して欲しい

第二日目は、前日の各分科会の報告が行われ、質疑応答がありました。ここでも、各実施団体から

は「国土交通省や、厚生労働省など、中央の情報をいち早く流して欲しい」と全腎協の協力を強く訴えていました。その後の全体会では、NP法人在宅ケア協会代表理事 外山誠氏を講師に招き「これから二十年 当業者による活動および社会参加を整理するために」と題して講演がありました。スライドを使い、地域全体の交通システムに対して当業者団体が担う役割についてお話されました。

二日間にわたって開催された交流会は、積極的な討議が行われ、有意義なものになりました。十一時四十分に至るの議事が終了し、皆さんはまたの再会を約束し散会となりました。

厚生労働省 インフルエンザ総合対策 《今年度の標語》

ひろげるなインフルエンザ ひろげよう咳エチケット

インフルエンザの流行が心配されていますが、厚生労働省は標語にある、咳エチケットをキーワードとした普及啓発活動をしています。

【咳エチケット】

○咳・くしゃみの際にはティッシュで口と鼻を押さえ他の人から顔をそむけ1m以上離れる。

○鼻汁や痰を含んだティッシュをすぐに蓋付きの廃棄物箱に捨てる。

○咳がでるときはマスクを着用する。

○マスクは説明書をよく読んで正しく着用する。

十分注意してください。



事務局より お休みのお知らせ

12月29日～1月6日

今年も1年お世話になりました。
良いお年をお迎えください

事務局一同



「『豊かさ』を求めて(二〇世紀) お金が全ての時代に...何か忘れていませんか?」

講師 相談役 江頭 博幸



先月号で、バスハイイクの時の江頭相談役による講演、「『豊かさ』を求めて(二〇世紀) お金が全ての時代に...何か忘れていませんか?」江頭相談役の広い知識と饒舌な話に涙する方もあり、感動を受けました。その内容を一部抜粋して掲載させていただきます。

現在の日本は、何の温かみも潤いもない、乾ききった、殺伐な世の中になっています。毎日のマスコミ報道を見れば、お分かりでしょう。何でそうなったのか?何が原因か?少し、独断と偏見で話します、と講演の口火をきられました。

二〇世紀はどんな時代だったか?

二〇世紀の前半は、戦争の歴史でした。一九四五年に終戦を迎え、敗戦により、暫くは、辛酸をなめる時代が続きました。しかし、勤勉な国民は、懸命に働き、少しずつ、「豊かさ」を取り戻してきました。一九五八年には、「三種の神器」テレビ、冷蔵庫、洗濯機が、国民の手の届くところまでできました。更に、一九六六年は、3C時代と言われ、カラーテレビ、



車(CAR)、クーラーが、持てるようになりました。日本列島改造論によって、庶民の生活は、欧米並みになったと、中流意識が浸透してきました。その結果、消費が美徳の世の中になり、使い捨てが流行しました。そして、最後は、働くことを止め、株や相場や、円ドル交換など、お金を動かすことにより、多額の利益が手に入るようになりました。ネオ・リベラリズム、新自由主義、市場原理主義、貨幣原理主義、マネタリズム、お金が全ての世の中になりました。最も人間を狂わせるものは金と言われますが、金、中心社会になってきました。

「心」は何処へ行ったんだ!

以上、見てきたように、お金が全ての世の中になり、「心」が疎かにされてきたのが二〇世紀ではないでしょうか?最初に医療の面で見ても、今、癌治療が最終段階に入ると、病院は、「出来ることは、全てしました。これ以上は治りません」と言って、患者を退院させます。人生最後の一番大事な時に、病院は患者を追い出すのです。また、昔は、治療するまで、入院できていたものが、今は、治療しなくても2週間すれば、患者は、否応なしに、退院させられます。何処に「心」の通った治療があるのでしょうか?これが、医療の現状です。

高知大学工学部を出て、エンジニアになり、全国各地を駆け回っていた人が、ある日、突然、糖尿病から、透析になり、失明しました。忙しくて、病院に行く暇もなく頑張っていたのですが、突然、倒れた時はもう、遅かったのです。

彼は失望のどん底に叩き込まれました。毎日、毎日、ベッドにうずくまり、自殺のことにばかり考えていました。奥さんが、どのような慰めの言葉をかけても、聞く耳を持ちませんでした。お先真っ暗です。ある日、まだ、二十歳(ハタチ)くらいの看護婦さんが、彼のもとに行き、「〇〇さん、私は、まだ二十歳で、〇〇さんの人生経験には及びもつかぬくらい若いのです。私は、〇〇さんに、人生の助言など出来ませんが、〇〇さん、もう一度人生頑張ってみませんか?」と言いました。〇〇さんは、その若い看護婦さんの一言で、目が覚めたように、蘇り、人生を再び歩くことを決意しました。若い看護婦さんの「心」が、〇〇さんの「心」に響いたので。これが、「心」ある治療というものではないでしょうか?

働くと泣くということ

働くと泣くとは、人の為に、土下座して、握り拳で大地を叩いて、大声をだし、涙を流すことです。今の日本人は、このような「働くと泣く」がなくなりました。ないで

ようか?何があっても、我、関せずの、知らんぷり。人のために泣くなど、とんでもないこともよように、なっていますか?

涙は、人間の心を洗うと言います。今の日本人は、余りにも涙をながしません。それが、殺伐な現状を表しています。

小林多喜二という、作家がいました。彼は、戦争反対と小説を書いたために、昔の特高警察に逮捕され、拷問に会い、裁判にもかけられず、殺されました。小林多喜二のお母さんは、多喜二に面会に行った時に、何も言わず、多喜二の手をグッと握り締め、働いたの短い間、泣き続けたのです。ただ、働くと泣くのみです。でも、この、母、せいさんの涙が、一番多喜二の「心」を打ったに違いありません。

母、せいさんの働くと泣くは、「多喜二、お前が、地獄に行くなら、わしも一緒に地獄に行くよ」と言うものではないか?「心」とはどんなものか、具体例をあげて説明しました。

世の中、お金が一番でなく、もっと大事なものは人の「心」ではないでしょうか?